

7月の「企画展示」を告知します！

6月の新着図書が配架された書棚を見ていたところ、次の本をたまたま手に取りました。萩原健『ガザ、戦下の人道医療援助』（ホーム社、2025年）です。何気なく読み始めると、内容にすぐ引き込まれました。パレスチナのガザ地区で、何が今、起きているのか。数ヶ月にわたる著者の濃密な体験が、無駄のない筆致でまとめられているため、現地の深刻さーアラブ人難民（ムスリム）にとってのーが、鮮明に伝わってきます。「この世界のどこかで苦境に直面している人びとの現実を、そうではない世界に暮らしている人びとに、少しでも現実味を持って受けとめていただければと思います、本書を記した」。著者の目的は十分に果たされていると思います。

ところで、著者が何者かというか、NGO「国境なき医師団」で働く海外派遣スタッフで、肩書きは「緊急対応コーディネーター」。紛争地に派遣される

「医師団」のあらゆる活動を統括する役割です。危険な戦場にて、「医師団」の活動に携わるスタッフの安全を最優先で守るため、沈着冷静な行動、適切な情報分析・判断などが、「コーディネーター」に求められるようです。だからこそ、ガザ地区の最新情勢が的確に記され、その緊迫ぶりがはっきりと伝わる文章になっているのではないかと思います。

本書で強調されていることの一つは、**ガザ地区の問題は日本に住む私たちにとっても、決して他人事ではない**、ということでしょう。それが「人間の尊厳」に関わっているからです。著者の主張は、次の文章に尽きます。**「度重なる出来事は、自分以外の誰をも入ることを許さず、一人ひとりが、ひっそりと、大切に、命さえ懸けて守ってきた自分だけの不可侵の領域、人間の尊厳をも侵害してきた。哀しみ、絶望、怒り、恨み、さまざまな感情は、人の心をずたずたに傷つけてきた。ガザに限らず、世界のいたるところで対立が生じている時代に生きる僕たち一人ひとりが、改めて「尊厳」という言葉の意味を自分に問い、確認することを切に願い筆をおく」**。「人間の尊厳」ー「人権」と言い換えてもよいでしょうーが侵害される状況は、ガザ地区だけで起こっているわけではありません。私たち個人の身の回りでも、そうした状況が起こり得ます。「人間の尊厳」をいかに守るか。私たちにとっても無視できない重要な課題が、ガザ地区の現状を通して問題提起されています。

著者がたびたび述べていますが、ガザ地区の問題を理解するためには、その背景をなす西アジアの国際問題ーいわゆる「中東問題」ーを学ぶ必要がある、とのこと。不勉強甚だしい私ですが、西アジアの国際問題について考えるための入門書を3冊紹介しておきます。一つは、岡真理『ガザとは何か パレスチナを知るための緊急講義』（大和書房、2023年）です。2023年10月から現在まで続いている、イスラエル軍によるガザ攻撃。この問題について、アラブ人難民の視点から解説していますが、その核心は、「イスラエルはどのように建国され、どのような国なのか」を理解することだと、著者は主張します。現地の歴史を学ぶ必要性が強調されています。続いては、白杵陽『イスラエル』（岩波新書、2009年）です。「パレスチナ問題」に深く関わるイスラエルの歴史。同国が抱える「暴力性」について、「シオニズムの論理、建国に至る力学、アラブ諸国との戦争、



新しい移民の波、宗教勢力の伸長、和平の試みと破綻など」を通じて明らかにしています。最後は、**酒井啓子『＜中東＞の考え方』（講談社現代新書、2010年）**です。つい先日のことですが、大きなニュースが飛び込んできました。イスラエル（・アメリカ合衆国）とイランの軍事衝突と急転回の「停戦合意」です。西アジアの国際関係は、なぜこうも不安定で、流動的なのか。酒井『＜中東＞の考え方』はその原因について、さまざまな視点－石油の産出、パレスチナ問題、米ソ対立の影響、イランの独自性など－から、西アジア諸国の近現代史をたどりつつ記述しています。

7月の「企画展示」テーマは、「戦争・平和」です。とりわけ現代の国際紛争、民族対立などを中心に、書籍を展示する予定です（合わせて、「ヨシタケシンスケの絵本パネル展示」も行います）。今年の夏、戦後80年目となる8月6日、9日、15日を迎えます。「戦争・平和」を考える大切な機会に、「企画展示」の本を借りてみませんか？

「沖縄全戦没者追悼式」で沖縄県豊見城市立伊良波小学校
6年の城間一步輝さん(11)が「おばあちゃんの歌」と題した「平和の詩」を朗読した。

平和の詩「おばあちゃんの歌」

豊見城市立伊良波小6年 城間一步輝さん



「平和の詩」を朗読する城間一步輝さん。沖縄県糸満市で23日、喜屋武真之介撮影

80年たったのに

毎年、ぼくと弟は慰霊の日に
おばあちゃんの家に行って
仏壇に手を合わせウートーをする

一年に一度だけ
おばあちゃんが歌う
「空しゅう警報聞こえてきたら
今はぼくたち小さいから
大人の言うことよく聞いて
あわてないで さわがないで 落ち着いて
入って いましよう防空壕」
五歳の時に習ったのに
八十年後の今でも覚えている
笑顔で歌っているから
楽しい歌だと思っていた
ぼくは五歳の時に習った歌なんて覚えていない
ビデオの中のぼくはあんなに楽しそうに踊りながら
歌っているのに

一年に一度だけ
おばあちゃんが歌う
「うんじゅん わんにん 艦砲ぬ くえーぬくざー」
泣きながら歌っているから悲しい歌だと分かっていた
歌った後に
「あの戦の時に死んでおけば良かった」
と言うからぼくも泣きたくなった

沖縄戦の激しい艦砲射撃でケガをして生き残った人のことを

「艦砲射撃の食べ残し」
と言うことを知って悲しくなった
おばあちゃんの家は
戦争が終わっていることも知らず
防空壕に隠れていた
戦車に乗ったアメリカ兵に「デテコイ」と言われたが
戦車でひき殺されると思い出て行かなかった
手榴弾を壕の中に投げられ
おばあちゃんは左の太ももに大けがをした
うじがわいて何度も皮がはがれるから
アメリカ軍の病院で
けがをしていない右の太ももの皮をはいで
皮ふ移植をして何とか助かった
でも、大きな傷あとが残った
傷のことを誰にも言えず
先生に叱られても
傷が見える体育着に着替えることが出来ず
学生時代は苦しんでいた

五歳のおばあちゃんが防空壕での歌を歌い
「艦砲射撃の食べ残し」と言われても
生きてくれて本当に良かったと思った
おばあちゃんに
生きていてくれて本当にありがとうと伝えると
両手でぼくのほっぺをさわって
「生き延びたくとう んちぬ ちるがたん」
生き延びたから 命がつながったんだね
とおばあちゃんが言った

八十年前の戦争で
おばあちゃんは心と体に大きな傷を負った
その傷は何十年経っても消えない
人の命を奪い苦しめる戦争を二度と起こさないように
おばあちゃんから聞いた戦争の話を伝え続けていく
おばあちゃんが繋いでくれた命を大切に
一生懸命に生きていく

戦後60年を迎え、「平和の火」の奥に広がる摩
た和子「沖縄県糸満市の平和祈念公園で23日、



【毎日新聞】
(6月24日付)